

「利別川」と「両国橋」

横 平 弘*

I. まえがき

この小論のきっかけとなった、土橋慶民氏（本別地方郷土史研究会代表）のエッセイが掲載された北海道新聞の記事を紹介する。

「(前段略)……国技館は(東京都)墨田区両国にあり、横を流れる隅田川に両国橋が架かっている。

両国橋と名付けられた橋は十勝の足寄町にもある。市街地を横断する利別川に架かる橋がそうだ。命名は明治2年(1869年)に『蝦夷(えぞ)』を『北海道』と改めて、11国86郡を創設した時、十勝国と釧路国の境を利別川に求めたことに起因している。昭和30年に合併した旧西足寄村は十勝国、旧足寄村は釧路国であり、2つの国を結ぶ橋が両国橋と名付けられたものである。

しかし、その歴史はさらに古く、松浦武二郎日誌等には、クスリ領アショロ村とあることから、アイヌ文化期の生活圏が利別川を境界としており、『トシ(縄)ベツ(川)』と呼称され、境界を意味したものと考えられる。

明治12年(1879年)中足寄に入地した細川繁太郎夫妻は、白糠町から山越えをして来たという。また上足寄の古老の話によると、祝い事をする晴れの日の買い物は、前々日に山越えをして白糠町まで行き、一泊して買い物を背負って帰り、準備したという。道路網が整備され、立派な両国橋のある今日では考えられないことである。

足にちなむ足寄町のイベントとして、町の社会教育課は、両国橋を渡り白糠への山道を、自らの足で歩き、歴史を訪ねる体験学習を実施し、郷土愛を培っている。」(1989. 11. 21, 朝刊, “朝の食卓”欄「両国橋」より)

上の記事では、両国橋の命名の因となった利別川の語源を「トシ(縄)ベツ(川)」とし、“境界”を意味したものと考えているが、まず、この点について吟味したい。

次に上記の足寄町及び東京都の「両国橋」と、その命名の由来である「両国」の地名について考えてみたい。

II. 利別川

北海道には利別川が2つある。1つは十勝平野東部を流れる十勝川支流であり、他は瀬棚平野(後志国)を流れるもので後志利別川とも呼ばれる。対象河川は前者であるが、両河川は同名同字のため、参考までに後者併せて、両河川名の語源を探ってみる。

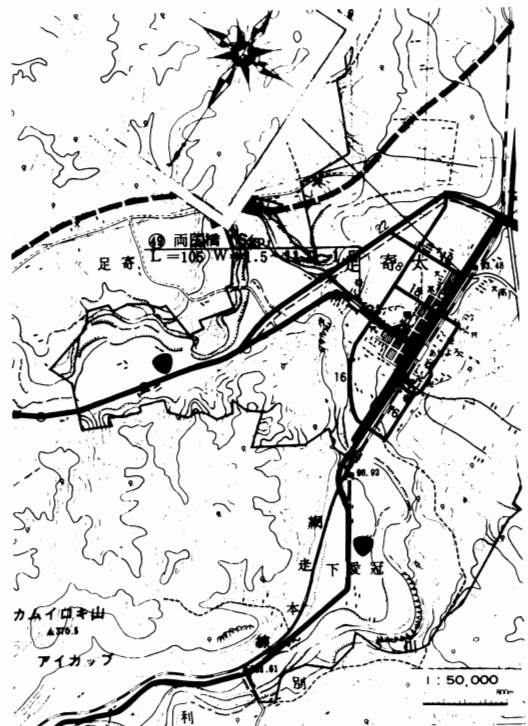


図1 利別川と両国橋の位置図
(北海道開発局241号足寄国道路線図(1988)より)

* 道都大学教養部

1. 利別川（十勝川支流）

アイヌ語では「利別川」と同義となる「利別」も併せて、資料の年代順に語源を記しておく。

① 北海道蝦夷語名解（永田方正：1891）

Tush pet ト^ツシュペツ

蛇川 直譯綱川 ○利別村

② 駅名の起源（国有鉄道札幌地方営業事務所：1950、高倉新一郎・知里真志保・更科源蔵・監修） 利別駅（としべつ）

アイヌ語「トシ・ペツ」（長蛇の如き川）を採ったもので、利別川が曲りくねっているのに因るものであろう。

③ アイヌ語地名解（更科源蔵：1982）

利別（としべつ）

根室本線の駅名。近くを流れている十勝川の支流の利別川から出たもので、これまでト^ツシュペツで縄川などと訳されていたが、ト・ウシ・ペツで沼の多い川であり、檜山の利別川も同じである。非常に曲流しているので、洪水のたびに川が切れて三日月沼が川添に多くあり、昔は今より多く沼があり、各沼には菱があったという。

④ アイヌ語地名の研究・第2巻（山田秀三：1983）

ト^ツシュペツ
利別川

十勝川最大の支流、水源は北見の諸川の水源地や阿寒に相対している。昔は池田の近くで十勝川と合流していたが、その後の河川改修で、旧十勝川の筋を流れ、茂岩のそばで、現在の十勝川に入っている。

後志瀬棚郡にも同名の利別川があり、どちらも意味がはっきりしない。〔永田地名解〕の Tush というのは「綱」のことであるが、蛇の忌詞にも使った。瀬棚の利別川の方には、境界線に綱を張ったからそういったのだ、と口碑もある。蛇が多くいたからそういったのか、蛇のように蛇行する川だという意味だったのか。言葉は簡明なのであるが、その実際の意味が判然としていない川名である。

⑤ 北海道の地名（山田秀三：1984）

利別川 としべつがわ

松浦氏東蝦夷日誌は「トシベツ。訳して縄川と云儀は、昔より此川筋アショロ、リクンベツ（陸別）と云は、クスリ（釧路）領なるが故に、時々境目論起りしが、此川口に縄を張って、クスリ土人を

十勝土人が通さざりしより号ると」と書いた。

（中略）、後志の利別川と合わせ考えたい名である。

⑥ 北海道地名一覧（栃木義正：1986）

利別（としべつ）

ト・ウシ・ペツ＝沼の多い川

出所＝北海道駅名の起源（日本国有鉄道北海道総局：1973）

2. 利別川（後志利別川）

① 北海道蝦夷語地名解（永田方正：1891）

Tush pet ト^ツシュペツ

蛇川 直譯綱川、十勝国に「トシュペツ」アリ義同シ

② アイヌ語地名解（更科源蔵：1982）

利別川（としべつがわ）

利別川という地名も疑問の多い地名である。トシュ・ペツで蛇川ともいわれ、この川を漁場の境にしたため、境界を明らかにするため川の中央に縄を張ったのでトシュ・ペツ（縄川）だともいわれている。ツウは「山崎」でシは「甚敷」だと説明するのもあって決定するのに困難である。ツウは峰でウシは有、ペツ川ともとれるが、ト・ウシ・ペツで沼の多くある川であると思われる。十勝川の支流利別川と同名。

③ 北海道の地名（山田秀三：1984）

利別川 としべつがわ

（前段略）

松浦氏西蝦夷日誌では「西地にての説はツウシベツにて、ツウは山崎の義。此川山崎が両方より出て来る故に名くと」とある。tu-ush-pet（山崎がある・川）の意。

同氏東蝦夷日誌では「トシベツ。縄川の義、其わけは此川フトロ（太櫓）、セタナイ（瀬棚）入組み領なる故、セタ内土人等川口に縄を張置き、もし太櫓土人がさわる時は償を取しと。依て名づけしなり」と書いた。トウシ・ペツ（tush - pet 縄・川）と考えられていたらしい。

永田地名解では「トウシ・ペツ（tush - pet 蛇・川）」と解した。tushは蛇をいうにも使われた。この川は屈曲、蛇行していた川で、昔は川下の辺で特にそれがひどかった。蛇がいたのかもしれないが、あるいはその蛇行している姿からこの名が出

たのかもしれない。

3. 考察

上記から知られる両河川の地名解を要約すると、次のようになる。

- ① 縄（綱）を張った川
- ② 蛇の多い川
- ③ 蛇行の著しい川
- ④ 沼の多くある川
- ⑤ 山崎が両岸に突出している川（後志利別川のみ）

次にこれらについて検討してみる。

① 両河川とも比較的大きく、アイヌ時代は現代よりも洪水が著しかったことから、塚を常時張り通すことは困難であったと思われる。

② とくに両河川だけ蛇が多かったとは考えにくい。

③ 蛇行の著しい河川名としてはシカリベツ（然別）、またはイシカリベツ（石狩別）などの命名の方が妥当であろう。

④ アイヌ時代は両河川とも下流部に沼が多かったことから、妥当な解釈である。

⑤ アイヌ語の同一地形地名には共通する地形が存在するのが一般的であり、この解釈が十勝の方には該当しないことから、妥当性には乏しい。

以上の結果から、ここでは利別（川）の地名解を更科（1982）及び栃木（1986）に基き、「沼の多い（くある）川」とする。

III. 両国橋

1. 釧路・十勝国境の沿革

明治2年（1869）に「北海道」が命名され、国・郡が創設の際には、隣接する2国の境界はほぼ主要河川系の境をなす山脈の分水嶺によることが一般的で、自然地理学的にかなっていた。

釧路国については、それまでの釧路アイヌの勢力が強かったせい、その一部が隣接の十勝・北見・根室各国との境界に相当する山嶺からの突出が著しく、そのため十勝国に包含されるべき足寄郡が釧路国の領域となって、利別川が国境線の一部を構成することとなった（吉田東伍：1970）。

当初の足寄村の発祥は、鹿ブームが起ったのを機会に明治12年（1879）、同村中足寄に入地した

細川繁太郎の定住によるもので、その後、利別川東岸の、足寄川との合流点に、（釧路国）足寄市街（後の足寄村本村市街）が発展した。

明治20年（1897）、北海道庁に19支庁制度が施行された際、釧路・十勝2国の隣接部はそれまでの境界のまま、「釧路」・「河西」（のちに「十勝」と改称）両支庁に引継がれたため、釧路支庁管轄の足寄郡足寄村と十勝支庁管轄の中川郡本別村（西足寄）とは支庁界の隣村となった。

明治43年（1910）に池田から利別川沿いに国鉄網走本線（現JR池北線）が開通したが、足寄付近の路線は同川西岸の西足寄側に敷設され、そこに足寄駅も開設されたため、足寄市街の対岸に西足寄市街が急速に発達して大正10年（1921）には本別村から西足寄村を分村した。さらに交通の利便性にまさる西岸の発展が東岸の市街を凌駕するに至って、昭和25年（1950）にはついに西足寄村は町制を施行した。

それより2年前の昭和23年（1948）、足寄郡は交通・経済・生活環境等で十勝支庁管内町村との関連性が深まったために、釧路国支庁（当時の名称）から十勝支庁へ移管された。これ以後、足寄郡（足寄村及び陸別村）の住民には「釧路国」の意識が次第に薄れてきた。

その後さらに人口増加等によって、経済や日常生活面で緊密性が高まり、地理的環境が一体化した西足寄・足寄両町村は昭和30年（1955）に合併して、日本一広い足寄町となった。これによって旧町村間の国境意識はほとんど失われて、現在では両者を結ぶ「両国橋」の名称のみがその名残りをとどめているにすぎない状況となっている。

2. 足寄町・両国橋の沿革

明治39年（1906）に足寄太からムカ（北見国）への道路開通に伴って、足寄地方の利別川で最初の橋が架けられた。これが両国橋の前身で、現在の位置よりやや下流であり、足寄川下・中流部の足寄村・螺湾村（釧路国）への入口となった。

明治45年（1912）に架換されて現位置付近に移設の際に、釧路国（足寄郡）と十勝国（中川郡）との接点に当るため、「両国橋」と名づけられた。それ以前は「第1号橋」とでも呼ばれたようである。

その後この橋は大正8年(1919)に大洪水で流出し、同10年(1921)に復旧した。それ以後も毎年のように補修され、さらに昭和12年(1937)以降、国費支弁の橋に昇格してからは数年おきに木橋の一部を架換えてきたが、同28年(1953)に永久橋となり、同44年(1969)に歩道部分が竣工し、さらに昭和49年(1974)に架換られて現在のものとなった。

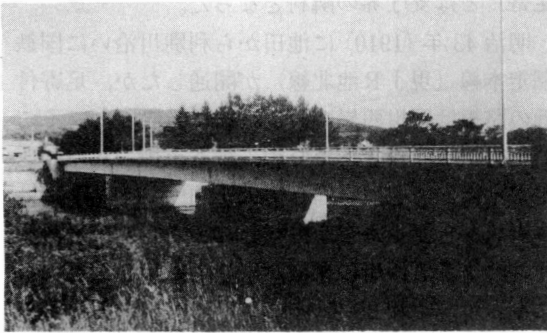


写真1 昭和49年10月竣工の両国橋
 <北海道開発局帯広開発建設部：「とかちの国道」(1981)より>

国の橋となってからも、釧路と十勝の関係で改修の時期が一致せず、橋の途中で新しい立派な欄干から古い老朽化した欄干に変わり、1つの橋で改修年度が異なる珍現象が続いた。

現橋は国道241号線(帯広一弟子屈間)では最大の道路橋で、十勝東部と釧路北部とを結ぶ幹線の要所にあり、また阿寒国立公園の西の玄関口として重要な位置を占めている。その橋梁概要は次のとおりである。

- 橋長：105.0 m
- 幅員：14.0 m
- 鋼重：207 トン
- 型式：ガーダー連続式
- 連数：3 連
- 支間：34.7 m
- メーカー：函館ドック

(「昭和48年度開発局発注鋼道路橋」による)

3. 武蔵・下総国境の沿革

「両国」は東京都の中央区と墨田区を結ぶ両国橋の東西橋詰一帯の地域名であるが、その由来は寛文元年(1661)に武蔵・下総の2国を結んだ隅田川に架けられた「両国橋」に因んだもので、当

時の江東方面は下総国葛飾郡に属していた。この2国の国境の変遷を、『角川日本地名大辞典・13・東京都』(1978)により、葛飾郡の歴史からたどってみる。



図2 東京都・隅田川周辺の近世以前国郡別図
 <角川地名大辞典・13・東京都(1978)より>

〔古代〕全域下総国に属し、その西端に位置した。隅田川が武蔵との国境であったが、2国の間には古東京湾が深く入り込み、大きな入江をなしていたと推定されている。(以下略)

〔中世〕太日川(江戸川)を境に葛西(郡)・葛東(郡)に2分される。現都域は葛西の南半に相当する。

〔近世〕江戸期には当郡のうち江戸川以西、すなわち葛西の地が武蔵国に入り、武蔵国葛飾郡が成立。武蔵国編入の時期は未詳だが、中世末~江戸初期には武蔵国となっていたと推定される。初期には南西部、隅田川河口の低湿地が江戸城下町の拡張に伴い、埋め立てられて町並地となり、一方南東部の低湿地の干拓も進んで多くの新田が成立した。(中略)都域部分は明治維新後、東京府に所属、明治11年(1878)、東・西・中・南・北の5葛飾郡の分割で南葛飾郡となる。

〔現在〕東京・千葉・埼玉の1都2県にまたがる。現都域では、葛飾・墨田・江東・江戸川の4区が旧葛飾郡内にあたる。

上記の経過からみると、両国橋の竣工時(1661)の江戸初期にはすでにその東岸地域の旧葛飾郡は武蔵国に編入されたものと推定されているが、当時の周辺地域住民にはまだ“そこは下総国”の意識が強く残っていたものと思われる。

なお明治37年(1905)に、総武鉄道(現総武本線)の「両国駅」が両国橋東詰近くに開設されて、以後「両国」の地名は広く定着したとみられる。

4. 東京都・両国橋の沿革

両国橋は東京の隅田川13橋の1つで、明暦3年(1657)の江戸大火(振袖火事)の折に、下町の隅田川には橋がなかったために多数の死傷者を出したことから、江戸市域を隅田川以東に拡張する政策をも兼ねて、寛文元年(1661)に竣工した官設の橋である。

当初、橋名は千住大橋から譲り受けて単に「大橋」と呼ばれていたが、東橋詰の江東方面は当時、下総国であったことから「両国橋」と俗称されており、元禄6年(1693)に新大橋が架設された際に「両国橋」と公式に改称された。他に「双国橋」・「二州橋」などの名もあったが、広くは使われなかったようである。その橋畔には橋詰広場が設けられ、夏の間は床見世や露店が立ち並び、多くの人出で賑わった。橋の上・下流で行われた川開きの花火は、江戸時代から広く親しまれてきた。

その後、明治8年(1875)に木桁橋で改架され、橋長162.5m、幅員10.9mであった。

次に明治37年(1904)にプラットラス橋として改架されたが、橋面は木造のため、大正12年(1933)の関東大震災で焼け落ちて構造材だけ残り、その中央径間は亀島川(隅田川河口部支流)の南高橋に再利用されて、現在も健在である。

同震災の改修は、昭和7年(1932)に長大なゲルバー橋として、旧位置より約20m上流に架橋されてその威容を誇ったが、橋詰広場はなくなり現在に至っている。その橋梁概要は次のとおりである。

橋長：164.5 m
幅員：24.0 m
構造：鋼桁
型式：ゲルバー
径間：3径間

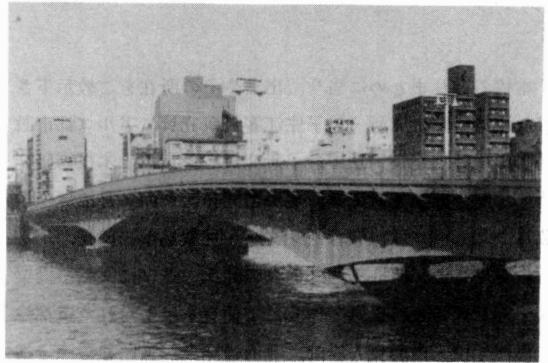


写真2 両国橋と隅田川
〈伊藤孝：「東京の橋」(1986)より〉

施行主体：東京都
(伊藤孝：「東京の橋」による)

5. 両国橋名称の現代的意義

「両国橋」は東京都・足寄町いずれも、当初は文字どおり相隣る両方の国の境界河川の上に位置したがその後、前者は行政的国境線の変更、後者も国境線に相当する支庁界線の行政的変更により、いずれも国境線上には位置しない橋となってしまった。ただ前者は中央区・墨田区の区界線上に位置し、また「両国」地域に立地する橋の名称としての意義は保有している。しかし、後者の場合は橋名と地域とのつながりはすっかり薄れてしまい、それを知っている者は足寄町在住の古老と郷土史関係者のみという状況である。

地名と同様に、橋名も地域の歴史を後世に伝える重要な文化遺産であり、かつて2国の橋渡し役をつとめた「両国橋」の橋名は、誇りをもって永遠に言い伝えられるべきものとする。そしてこの意義を今後も保持していくためには、例えば関係の東京都墨田区と足寄町とで“友好条令”を結び、イベントの企画や両国橋に関する情報交流をはかることなどが望まれる。これに応ずる有識者の動向が期待される。

IV. あとがき

利別川の地名解と同川に架かる両国橋の名称由来について、資料をひもといて一応の成果が得られたが、これを端緒として、今後はこの「橋・川・地域」三位一体の結びつきを探って、土木史・土地理学的なアプローチを試みたいと考えてい

る。

本稿のとりまとめに当り、出典やその所在をご教示下された政策科学研究所・昌子住江客員研究員、アルゴ都市設計水環境計画室長・長屋静子研究員、東京都土木技術研究所・土屋十圀主任研究員、北海道開拓記念館・丹治輝一学芸員、北海道立理科教育センター・那賀島彰一室長、足寄町教育委員会・餌取雄四郎係長の諸氏、並びに文献・橋梁図・写真等の資料提供・作成にご便宜をはかられた道都総合専門学校・内藤克人講師、北海道開発局道路建設課・横田貞市係長、北海道開発コンサルタント株式会社橋梁部・進藤義郎部長の諸氏に深謝の意を表する。

参考文献

- 足寄町史編纂臨時専門委員会 (1973)：『足寄町史』，足寄町役場，558，1020～1021，1023～1024 ページ。
- 北海道土木技術会鋼道路橋研究委員会 (1982)：『北海道における鋼道路橋の歴史 (資料編)』，71 ページ。
- 北海道開発局帯広建設部 (1981，1986)：『とがちの国道 (第 I，II 巻)』，北海道開発協会，339～347，450～451 ページ。
- 伊藤孝 (1986)：『東京の橋』，鹿島出版会，94～95，258～259 ページ。
- 伊藤孝 (1989)：『隅田川の橋を探検する』，『隅田川の歴史』所収，かのう書房，72～76 ページ。
- 角川文化振興財団 (1978)：『角川地名大辞典・13・東京都』，角川書店，192～193，754～755 ページ，付図。
- 角川文化振興財団 (1987)：『角川地名大辞典・1・北海道 (上・下巻)』，角川書店，961～963，1024～1027，1287，1308 ページ。
- 松崎稔 (1980)：『足寄あれこれ』，松崎印刷株式会社，7～9 ページ。
- 永田方正 (1891)：『北海道蝦夷語地名解』，北海道庁，151，158，360 ページ。
- 岡田春秋 (1988)：『橋づくし』，みづうみ書房，62～63 ページ。
- 更科源蔵 (1982)：『アイヌ語地名解—北海道地名の起源』，北書房，24，235 ページ。
- 高倉新一郎，他 (1950)：『駅名の起源』，国有鉄道札幌地方営業事務所，80 ページ。
- 栃木義正 (1986)：『北海道地名一覧』，72，110 ページ。
- 山田秀三 (1983)：『北海道の川の名』，『アイヌ語地名の研究・第 2 巻』所収，130，186～187 ページ。
- 山田秀三 (1984)：『北海道の地名』，北海道新聞社，294～295，450 ページ。

吉田東伍 (1970)：『増補・大日本地名辞書・第 8 巻』，富山房，296～197 ページ。